芸術研究７　―玉川大学芸術学部研究紀要―　2015　pp. 79~87
STUDIES IN ART 7　―Bulletin of Tamagawa University, College of Arts―　2015

［公演ノート］

日本の信徒発見150周年演奏会
―聖歌で伝える信仰―

The 150th Anniversary Concert of the Discovery of "Japanese Hidden Christians"
―Tradition of Faith through Hymns―

小口浩司
Koji Oguchi

〈抄　　録〉

日本の信徒発見150周年を迎えた2015年３月17日、筆者は国宝・大浦天主堂（長崎市）にて行われたミサと祝賀演奏会に携わった。また、東京でも記念演奏会を主宰した。

本稿は、「日本の信徒発見」という近代カトリック教会復活の出来事を広く伝えるために、長崎と東京で行った活動記録である。

キーワード：日本の信徒発見、コンサート、プログラム、指揮、聖歌隊

Abstract

At the 150th Anniversary of the Discovery of Japanese Hidden Christians, celebrated on March 17th 2015, I was engaged in the Mass and the celebration concert held at Nagasaki Oura Catholic Church as a conductor and an organist. I also presided over the commemorative concert in Tokyo.

This article is the record of performance activities carried out in Nagasaki and Tokyo, in order to convey widely the event of the modern Catholic Church revival and the discovery of Japanese Hidden Christians.

Keywords: The Discovery of Japanese Hidden Christians, Concert, Program, Conducting, Choir

１．はじめに

指揮者でクワイヤーディレクター（聖歌隊音楽監督）の筆者は、2015年３月、長崎と東京での演奏会を企画、立案、主宰した。本稿は、聖歌隊グループ〝アンサンブル・クワイヤー・スペラ〟と共に行った演奏会の活動記録である。

所属：玉川大学芸術学部非常勤講師
受領日　2015年11月30日

2．演奏会の目的と概要

2.1　目的

「日本の信徒発見」は、現代を生きる日本のキリスト信者にとって、信仰の礎となる出来事である。260年に及ぶキリシタン迫害の中を、7代に亘って信仰を守り抜いていた潜伏キリシタン[1)]が、1865年3月17日の昼下がり、長崎の大浦天主堂で信仰告白によって発見された（詳細は3.1に示す）。2015年は、その日から150年目に当たる。長崎では多数の関連行事が企画され（表1）、当日は大浦天主堂で一日中ミサが執り行われた。長崎での祝賀演奏会の目的は、まさにこの記念日を聖歌の演奏で祝い、カトリック信仰の今を確認することであった。

しかし、この出来事はカトリック信徒であっても、日本中で認知されているわけではなかった。日本の信徒発見を、長崎のローカルな出来事として終わらせてはならないと考えた筆者は、東京でも記念演奏会を企画する運びとなる。

以上のような理由でスタートしたこの演奏会に寄せて、カトリック長崎大司教区の髙見三明（たかみ みつあき）大司教が綴ったプログラムの挨拶文を引用する。

> キリスト教が日本に導入されて460年余りになりますが、その半分以上の260年間、キリスト教は禁じられたため、信者たちは隠れてひそかに祈り、歌うしかありませんでした。しかし、いつかは迫害も終わって、どこででも自分たちの歌を歌って歩けるようになると信じ続けました。その日が、「日本の信徒発見」によって訪れます。今から150年前の3月17日、長崎の大浦天主堂で浦上の潜伏キリシタンがパリ外国宣教会のプティジャン神父と歴史的な出会いをしたのです。信教の自由を得るためには、なお8年の歳月が必要でしたが、それ以来、キリスト信者も自分たちの歌を自由に歌うことができるようになりました。
>
> アンサンブル・クワイヤー・スペラは、キリスト教の音楽を極めつつ、福音を伝えるため、超教派的に活動しておられます。彼らが奏でる聖歌の心髄を、一人でも多くの方々に聴いていただければ幸いです。　（『ごあいさつ』　カトリック長崎大司教区　髙見三明）

2.2　概要

長崎での祝賀演奏会（図1）と東京での記念演奏会（図2）の告知フライヤー、演奏会概要をまとめたものを示す（表2）。

補足として、東京公演に東京オペラシティを使用した理由について触れる。

それは、日本がヨーロッパのように、教会文化が定着している国ではないということだ。長崎に限れば町と教会が一体化しているが、毎日相当数の音楽会が開かれている東京は、良い音楽は良いホールで聴く、という文化が根付いている場所である。一般の人々にとって教会は、クリスマスに少し頑張って顔を出してみる場所に過ぎない。本来、教会は全ての人に向けて開かれている定義ではあるものの、やはり敷居が高いことは否めない。

多くの人たちに聖歌の演奏を聴いて頂く機会を作りたいと望んだ筆者が、東京での公演会場にコンサートホールを選択したことは、必然であった。

（表1）信徒発見150周年記念関連行事一覧表

日時	内容	備考
２／15（日） 13：00 （12：00開場）	オペラ『沈黙』《演奏会形式》長崎公演（長崎大司教区後援）　於：長崎ブリックホール大ホール 「沈黙」の舞台となった殉教の地長崎での初演を行うことは誠に意義深く、多くの方々にお聴きいただきたいコンサートです。	チケット問い合わせ： 株式会社NBCソシア企画制作管理部 095－826－5304
２／19（木） 19：00	大浦天主堂献堂150周年記念ミサ（長崎大司教区行事）　於：国宝大浦天主堂 このミサの中で、新祭壇の祝福と教区シノドス（教区代表者会議）提言に対する高見大司教による署名・承認が行われます。	
２／19（木）～ ４／15（水）	企画展『聖母が見守った奇跡』（長崎大司教区特別協力）　於：長崎歴史文化博物館 キリスト教の伝来から、発展、弾圧、復活の歴史を長崎奉行所の押収資料や長崎県内に残る関連資料を通して紹介します。	有料 長崎歴史文化博物館観覧料
２／21（土） 19：00～20：00	日本の信徒発見150周年記念公開講座《全４回の第１回》　於：国宝大浦天主堂 全４回の講座で日本の信徒発見を噛みくだいて説き明かします。 講師：高見三明長崎大司教　テーマ：「キリスト教」	聴講無料。
２／28（土） 19：00～20：00	日本の信徒発見150周年記念公開講座《全４回の第２回》　於：国宝大浦天主堂 講師：デ・ルカ・レンゾ神父（二十六聖人記念館館長） テーマ：「キリスト教伝来」	〃
３／７（土） 19：00～20：00	日本の信徒発見150周年記念公開講座《全４回の第３回》　於：国宝大浦天主堂 講師：片岡千鶴子修道女（純心女子学園理事長） テーマ：「キリスト教禁止令」	〃
３／８（日） 16：00	シンポジウム「津和野殉教者の列聖をめざして」（広島教区主催）　於：長崎カトリックセンター 【シンポジスト】高見三明長崎大司教、前田万葉大阪大司教、平林冬樹神父（イエズス会） 浦上キリシタンが流された津和野の殉教者の列聖・列福運動を広島教区が始めました。	入場無料。
３／８（日）～ ４／26（日）	特別展『津和野に流された浦上キリシタン』（広島教区主催）於：浦上キリシタン資料館 日本の信徒発見150周年を機に開館した浦上キリシタン資料館で、資料とパネルを通して、津和野乙女峠での浦上キリシタンの信仰のあかしを紹介します。	入場無料。 住所：長崎市平和町11-19 電話：095－807－5646
３／11（水） 18：30	日本の信徒発見150周年記念劇　於：チトセピアホール 「そして　サンタ･マリアがいた――キリシタン復活物語――」（長崎中地区評議会主催） 神父、信徒による日本の信徒発見の記念館です。	※チケットのお求めは各教会にて。
３／14（土） 19：00～20：00	日本の信徒発見150周年記念公開講座《全４回の第４回》　於：国宝大浦天主堂 講師：古巣　馨神父（長崎純心大学教授）テーマ：「信徒発見」	聴講無料。
３／15（日） ミサ　14：00 ミサ前に聖母行列	日本の信徒発見150周年記念「聖母行列とミサ」（長崎中地区評議会主催）　於：浦上教会 ――次世代に信仰を守り伝えるために―― ミサ前の聖母行列は、１グループは大橋サンタ・クララ教会跡で13：00に出発式、２グループは聖マリア堂跡を12：35に出発し、聖ヨゼフ堂跡で12：45に出発式があります。	
３／16（月） 講演会16：00 祝福式17：00	聖トマス西と十五殉教者記念庭園祝福式と講演（長崎大司教区主催）　於：中町教会 【講演】講師・片岡千鶴子修道女（純心女子学園理事長）【祝福式】17：00 信徒発見150周年記念事業である記念庭園の完成を祝います。	
３／16（月） 19：00	日本の信徒発見150周年祝賀会　於：ホテルニュー長崎	招待者のみ
３／17（火） 10：00	日本の信徒発見150周年記念ミサ　於：国宝大浦天主堂 教皇特使をお迎えしてのミサです。このミサをもって教区シノドスは閉会します。	招待者のみのミサ。
３／17（火） ① ６：30④15：30 ② ８：00⑤17：00 ③13：30⑥19：00	日本の信徒発見150周年記念連続ミサ　於：国宝大浦天主堂 国宝大浦天主堂は収容人数に限りがありますが、ミサ参加希望者が信徒発見の場でミサに参加できるよう、６回の連続ミサを準備しました。	団体（15人以上）の申込み受付は終了。 個人（14人以下）での参加は当日整理券を配布。
３／17（火） 連続ミサ⑥19：00の部 閉祭後（20：00ごろ）	日本の信徒発見150周年記念祝賀演奏会　於：国宝大浦天主堂 カトリック信徒小口浩司氏指揮によるアンサンブル・クワイヤー・スペラの演奏会です。 小口浩司作曲の「『日本の信徒発見聖母』に捧げるミサ曲」の初演でもあります。	無料ただし事前申込 電話　050－3386－4980
３／17（火） ６：00～20：00	大浦天主堂下の大浦教会でゆるしの秘跡を受けることができます。	
３／21（土） 14:00(13:30開場)	“復活の丘”コンサート（アジェンダNOVAながさき、浦上教会等共催）　於：浦上教会 明治初頭の流配、昭和戦争末期の被爆という苦難から立ち上がった浦上で、平和を願うコンサートを開催します。	チケット必要 （２月10日販売開始予定） チケットぴあ、浜屋プレイガイド
12／６（日）未定	カトリック神学院創立150周年記念ミサ　於：浦上教会 ミサ前には、高見三明大司教による神学校の歴史についての講演を予定しています。	
通年	子ども大浦巡礼 詳細は長崎教区の各小教区へ送付している「巡礼案内書」の通りです。	
通年	信徒発見をメインテーマに、資料展を開催します。　於：浦上キリシタン資料館	住所：長崎市平和町11-19 電話：095－807－5646

日本の信徒発見150周年記念事業実行委員会（カトリック長崎大司教区本部事務局内）
問い合わせ先：電　話　050-3386-4980
メール　cnkh45@nagasaki.catholic.jp

（図1）長崎公演フライヤー

（図2）東京公演フライヤー

（表2）演奏会概要

日本の信徒発見150周年記念祝賀演奏会（長崎）	日時：2015年3月17日（火）20：00開演 場所：国宝・大浦天主堂 入場：事前申込みによる入場整理券（全席自由）
日本の信徒発見150周年記念祝賀演奏会（東京）	日時：2015年3月23日（月）19：00開演 場所：東京オペラシティ リサイタルホール 入場：3,000円（全席自由）
指　　揮	小口浩司
合　　唱	Ensemble Choir SPERA（アンサンブル・クワイヤー・スペラ）
オルガン	永瀬真紀（東京公演のみ）
協　　力	聖パウロ女子修道会
後　　援	カトリック長崎大司教区、キリスト新聞社

3．演奏会の構成

3.1　日本の信徒発見について

1549年、フランシスコ・ザビエル（1506～1552）によって日本にもたらされたキリスト教は、260年に及ぶ禁教令の下で迫害の道を辿る。1597年、豊臣秀吉（1537～1598）によって出された「バテレン追放令」によって、京都で捉えられた26人の宣教師ら（後の日本26聖人）は、長崎まで引き回され、現在の長崎市にある西坂公園で十字架にかかり、殉教[2]した。江戸時代になると、鎖国やキリスト像を踏む「絵踏み」などによって、キリシタンの取り締まりは、より強固なものとなっていく。日本の小ローマと呼ばれるほどキリスト教が栄えた長崎も、「寺請け制度」によって仏教の檀家に入ることが強制され、表向きはキリシタンの姿がなくなった。しかし、仏教徒を装いながら潜伏キリシタンとしてオラショ[3]を唱え、信仰を守り抜いた人々がいた。

時は超えて1865年2月19日、長崎市の居留地近くの南山手地区に、天主堂が創建された。日本26聖人が殉教した西坂の丘に向かって建てられたこの教会こそ、大浦天主堂である。それから約1ヶ月

後の3月17日、浦上の信徒たちが意を決しこの場所を訪れ、ベルナール・プティジャン司教（1829～1884）に自分たちがキリシタンであることを告白した。これが、「日本の信徒発見」であり、キリスト教の世界では宗教上の奇蹟とまで言われている。

こうして、近代カトリックの新しい歴史はスタートしたが、迫害は明治政府にも受け継がれる。キリスト教の禁教令が撤廃されたのは信徒発見から8年後の1873年、諸外国の非難を受けてのことであった。晴れて自由を手にした潜伏キリシタン達は、次々にカトリックに復帰した。しかし、外海（そとめ）、平戸、生月島や五島列島では、カトリックに戻らなかった集落が今も存在する。禁教下で先祖から受け継いだ信仰生活が根付き、その慣習を大事に伝承する、かくれキリシタンと呼ばれる人々がそうである。

3.2　選曲のコンセプト

3.2.1　歴史を踏まえた曲目

今回の演奏会は、日本のカトリック教会の歴史を聖歌で辿った。この点について筆者が『キリスト新聞』のインタビューに答えているので、一部引用する。

> 演奏会では、『典礼聖歌』や『カトリック聖歌集』からさまざまな曲目を選ぶ予定ですが、「日本の信徒発見の聖母」なので、まずは日本の中で大事にされてきているものを取り上げたいと考えています。信徒発見という出来事があった当時の典礼は、ラテン語でなされていました。私が2年前の3月17日に大浦天主堂でミサに与ったとき、ミサ曲はラテン語だったのです。日本語のものもやっていました。隣に座っていた外国の信徒は日本語の歌は歌えないが、ラテン語のミサ曲は一緒に歌っていました。
>
> 第二バチカン公会議以後、各国の言葉を大事にするということになっていますが、教会の公用語としてラテン語を捨ててはならないとする部分はまだありますし、そこで培われてきた伝統作品も大切にする必要があります。（中略）日本のカトリック教会は『典礼聖歌』を中心にやっていますが、『典礼聖歌』の前に『カトリック聖歌集』があります。『カトリック聖歌集』は典礼のなかで歌われることは少なくなってきましたが、それらは文語体で、先人が大事にしてきた日本語の聖歌ですから大切にせねばなりません。『典礼聖歌』も自然にミサで歌っているものですが、改めて芸術的な観点からスポットを当てることによって、その楽曲の本質をもう一度皆さんに確認していただきたい。普段は歌うことによって〝アウトプット〟しているものですが、聞くという〝インプット〟する作業をすることは、ある意味「黙想」だと思います。
>
> （『キリスト新聞』5面 2014年12月24日）

まとめると、カトリック教会で公用語として大事にされてきた「ラテン語」の聖歌、現在のミサでは歌われる機会が少なくなっているが長く愛唱されてきた『カトリック聖歌集』、現在使用されている『典礼聖歌』より、選曲したことになる。

3.2.2　新たに作曲した曲目

今回、この演奏会のために《日本の信徒発見聖母に捧げるミサ曲》を、筆者が新たに書き下ろした。

大浦天主堂には、祭壇に向かって右手にマリア像が安置されている（図3）。この場所で信徒発見が起こったので、通称「信徒発見の聖母」と呼ばれる。この聖母から発想を得て作曲したのが、本作である。テキストは、現代の日本人が自分たちの言葉で祈ることができるように、日本のカトリック

（図3）大浦天主堂で指揮を振る筆者

教会で今日用いられているラテン語訳を、そのまま引用した。また、大浦天主堂をはじめ、長崎の教会堂にはめ込まれたステンドグラスと教会堂に差し込む光のコントラストを表現するために、作曲に際しては旋律と和音の動きを大事にし、色彩感を出した。曲の構成は、《あわれみの賛歌》《栄光の賛歌》《感謝の賛歌》《平和の賛歌》の4曲から成る。

3.2.3　キリスト教の暦を踏まえた曲目

演奏会を行う時期は、キリスト教では四旬節[4]にあたる。そのため、3月17日の祝祭だけを考えるのではなく、キリスト教の暦も考慮した曲目を、プログラムに組み込んだ。

3.3　演奏会のプログラミング

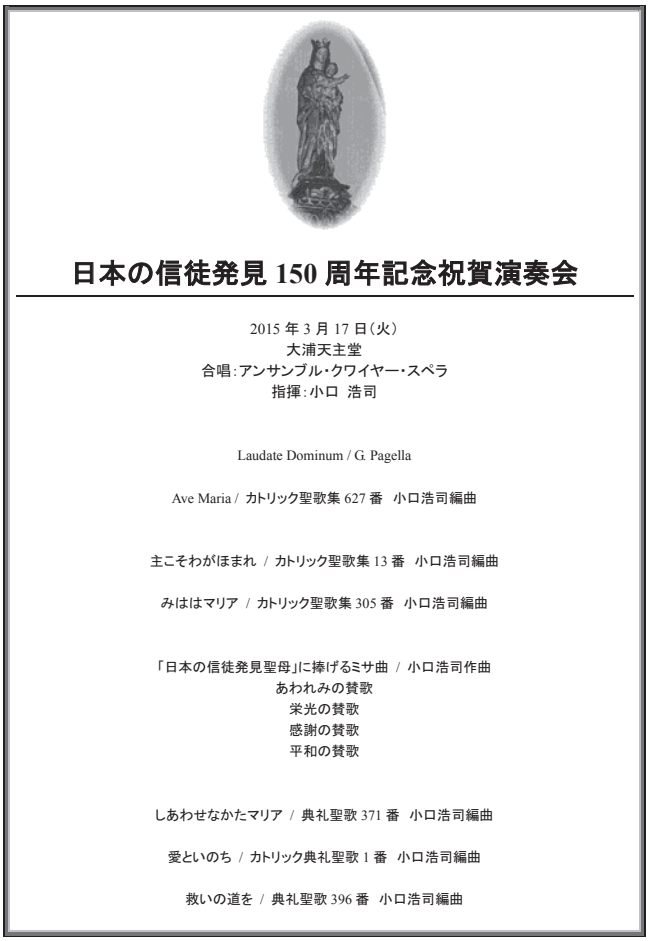
3.3.1　長崎公演

長崎では、ミサと一体企画の演奏会であった。そのため、祝賀演奏会は選曲のコンセプトを凝縮し、演奏時間約40分のプログラムを組み立てた（図4）。カトリック教会で生まれた直球勝負の曲を提供し、筆者が作曲した《日本の信徒発見聖母に捧げるミサ曲》の初演も行った。

3.3.2　東京公演

東京でのプログラムは2部構成で、演奏時間は約100分となった（表3）。前半は、「日本の信徒発見」がテーマで、歴史を知らない人にも、興味関心を持ってもらうことができるように、プログラムの流れに気を使った。長崎で初演した筆者の新曲披露や、日本人として初めて殉教した日本26聖人を、音楽で伝える時間も持った。

後半は、四旬節に歌われる作品をメインに据え、ラテン語の聖歌や、筆者編曲の『典礼聖歌』を中心に演奏した。一般の人々には馴染みの薄い作品も多かったであろう。そのため、これらの作品を飽きずに聴いてもらう工夫として、1曲の演奏時間が極力短いものを選ぶと共に、豊かなメロディを伴った耳馴染みの良い作品を集めたことが挙げられる。



日本の信徒発見 150 周年記念祝賀演奏会

2015 年 3 月 17 日（火）
大浦天主堂
合唱：アンサンブル・クワイヤー・スペラ
指揮：小口 浩司

Laudate Dominum / G. Pagella

Ave Maria / カトリック聖歌集 627 番 小口浩司編曲

主こそわがほまれ / カトリック聖歌集 13 番 小口浩司編曲

みははマリア / カトリック聖歌集 305 番 小口浩司編曲

「日本の信徒発見聖母」に捧げるミサ曲 / 小口浩司作曲
あわれみの賛歌
栄光の賛歌
感謝の賛歌
平和の賛歌

しあわせなかたマリア / 典礼聖歌 371 番 小口浩司編曲

愛といのち / カトリック典礼聖歌 1 番 小口浩司編曲

救いの道を / 典礼聖歌 396 番 小口浩司編曲

（図4）長崎公演プログラム

（表３）東京公演プログラム

日本の信徒発見記念演奏会　プログラム　2015年３月23日（月）東京オペラシティリサイタルホール	
第１部	第２部
しあわせなかたマリア　『典礼聖歌』371番 愛といのち　『カトリック典礼聖歌』１番 救いの道を　『典礼聖歌』396番 主こそわがほまれ　『カトリック聖歌集』13番 きよくとうとき　『カトリック聖歌集』64番 みははマリア　『カトリック聖歌集』305番 「日本の信徒発見聖母」に捧げるミサ曲 小口浩司作曲 「テゼ共同体」のうたによる 日本26聖人殉教者への祈り 小口浩司編曲	Laudate Dominum　G. Pagella Christe eleison　T. L. de Victoria O vos omnes　G. M. Asola Adoramus Te Christe　O. di Lasso Ave Maria　『カトリック聖歌集』627番 Confitemini Domino　A. Constantini 『典礼聖歌』によるミサ曲と四旬節の祈り 小口浩司編曲 For the beauty of the earth　C. Kocher Were you there？　黒人霊歌 Amazing grace　黒人霊歌 Immaculate Mary　フランス民謡

4．まとめ

4.1　聖歌と信仰

聖歌の歌詞を見ると、神への賛美のために書かれたことは一目瞭然である。同時に、教会共同体の中で脈々と受け継がれてきた、信仰の表出であることにも気付く。これは近代カトリックに限ったことではない。筆者は、五島列島の中通島（なかどおりじま）を訪問した際、かくれキリシタンの帳方（ちょうかた）[5] より実際にオラショを聴いた。カトリックの祈りとは言葉が違っていたものの、神への賛美や聖母マリアへの祈りの根底は、全く同じであったのだ。

このようなテキストに音楽が付くと、かつて聖アウグスティヌス（354 ～ 430）が「歌うことは2度祈ること」と述べたように、言葉のエネルギーが増幅する。カトリック長崎大司教区事務局長の下（しも）窄英知（さこえいち）神父も、次のように述べている。演奏会での挨拶を、文字に起こして引用する。

> 私も前から2番目の席に座ってそれを聴いたわけですけれども、大体が私の知っている歌なんですね。それで聴きまして、あんな歌をこういう風に歌うのかという風に感じたのが正直なところでありました。（中略）今日2回目でありますが、この日本の信徒発見聖母を2回目今日聴きまして、ゆっくり聴かせて頂いたんですけれども、聴きながら「ヤバイ、これは癖になりそうだ。」という風に感じまして、当初聴いた時の戸惑いからこの段々と慣らされてきているなという風に感じているところです。とても心地良いです。皆さんもどうぞ心地良い時間をお過ごしください。どうもありがとうございました。
>
> （日本の信徒発見記念演奏会 2015年3月23日（月）東京オペラシティリサイタルホールにて）

このように、医学的根拠はないかもしれないが、言葉は音楽を纏うことで人の心の中により深く浸透すると考えられる。また、歴史的事実は書物で確認することが出来るが、信仰という目に見えない歴史は、学ぶことよりも心で感じることなくして、理解は出来ない。同じ目に見えない「音楽」というフィルターが、それを可能にするのだ。

（図5）東京公演を指揮する筆者

4.2　今後の展望

前節で神父の挨拶にあったように、聖職者が「心地良い」とも述べるのが聖歌である。筆者は、聖歌がカトリックの典礼音楽のみならず、全ての人々の癒しにもなると推察した。今回、長崎と東京で行った公演は、いずれも満員御礼となったが、この現象も、社会が聖歌を求めている現れである。聖歌は、現代人のニーズにあった歌といえるのではないだろうか。

癒しを求めるということ、それは即ち、現代人が疲れているということだ。自分が何者で、何ができるのかを見失っている人も多いだろう。しかし、迫害の中で信仰を守り、育て、伝えてきたキリシタン達を憶えるとき、我々にも課せられた責務があることを痛感する。一人一人がそれを認識し、役割に目覚め、生きる希望に満ちた社会を創っていかなくては、万人の希望である真の平和など、実現できるわけがない。

それゆえ、筆者ができる社会貢献こそ、聖歌を通して多くの人々にメッセージを発信していくことだと考える。聖歌が伝える「日本の信徒発見」を巡る信仰の歴史が、次の世代を生きる人と人とを繋ぐ架け橋となるように、演奏活動を継続していきたい。

謝辞

今回の演奏会開催に際して、各方面から多大なお力を頂戴した。聖パウロ女子修道会のシスターの皆様、カトリック長崎大司教区の神父様方並びに事務局の皆様、キリスト新聞社の皆様、東京オペラシティホールの皆様、長崎と東京公演に全面的にかかわってくれたマネージメントスタッフの皆様、その他、ご支援下さった全ての方々に、心から感謝申し上げたい。

注

1）潜伏キリシタン：禁教時代に表向きは仏教徒として生活し、キリスト教の信仰を伝承したカトリックの信徒たちのこと。
2）殉教：教えに従うこと。信仰を守り通し、尊い命をかけて神に従った人々の行動を指すことが多い。
3）オラショ：もともとはラテン語の祈りのこと。現在では、潜伏キリシタンが伝承した祈りの言葉を指すことが多い。ラテン語が日本語の方言と結びついて出来上がった。
4）四旬節：40日間の意味。キリスト教の暦で、復活祭の前に定められた準備の期間。
5）帳方：かくれキリシタンの最高指導者のこと。

参考文献

大橋幸泰『潜伏キリシタン　江戸時代の禁教政策と民衆』講談社、2014
長崎の教会群インフォメーションセンター『大浦天主堂物語』カトリック長崎大司教区、2015